

雷のさずけもの

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、尾張^{おわりの}くに一人^{ひとり}のお百姓^{ひやくしやう}がりました。ある暑^{あつ}い夏^{なつ}の日^ひにお百姓^{ひやくしやう}は田^での水^{みづ}を見^みに回^{まわ}つていますと、急^{きゆう}にそこらが暗^{くら}くなつて、真^まつ黒^{くろ}な雲^{くも}が出てきました。するうち雲^{くも}の中からぴかりぴかり稲妻^{いなずま}がはしり出^だして、はげしい雷^{かみなり}がごろごろ鳴^なり出^だしました。やがてひどい大夕立^{おおゆうだち}になりました。お百姓^{ひやくしやう}は「桑原^{くわばら}、桑原^{くわばら}。」と唱^{とな}えながら、頭^{あたま}をかかえて一本^{ほん}の大きな木の下に逃^にげ込^こんで、夕立^{ゆうだち}の通^{とお}りすぎるのを待^まつていました。すると間^まもなく、がらがらツと、天^{てん}も地^ちもいっしよに崩^{くず}れ落^おちたかと思^{おも}うようなすさまじい音^{おと}がしました。お百姓^{ひやくしやう}は思^{おも}わず耳^{みみ}を押^おさえて、地^ちの上^{うへ}につつ伏^ふしました。しばらくしてこわごわ起き上^あがつてみますと、つい五六間^{けんさき}先に大きな光^{ひか}り物^{もの}がごろごろていました。お百姓^{ひやくしやう}はふしぎに思^{おも}つて、そつとそばに寄^よつてみますと、それは奇^き妙^{みょう}な顔^{かお}をして、髪^{かみ}の毛^けの逆^{さか}立^だつた、体^{からだ}の真^まつ赤^かな、子^こ供^{ども}のような形^{かたち}のものでした。これは雷^{かみなり}があんまり調^{ちやう}子^しに乗^のつて、雲^{くも}の上^{うへ}を駆^かけ回^{まわ}るひようしに、足^{あし}を踏^ふみはずして、地^ちの上に落^おちて、目^めを回^{まわ}したのでした。お百姓^{ひやくしやう}は、

「ははあ、なるほど、これが話に聞いた雷かな。何だ、こんなちつぽけな、子供みたいなものなのか。」

「思いながら、半分は気味が悪いので、いきなり鍬を振り上げて、打ち殺そうとしますと、雷は気がついて、あわててお百姓を止めました。」

「まあ、そんな乱暴なまねをしないで下さい。つい雲を踏みはずして落ちてきただけで、何もあだをするものではありませんから、どうぞ勘弁して下さい。」

「雷は雷はいつて、手を合わせました。お百姓は、雷、雷つて、どんなにこわいものかと思つたら、一度落ちると、からきし、いくじのないものだ。」

と思つて、

「じゃあかわいそうだから助けてやる。だがこんどから落ちることはならないぞ。そのたんにびつくりするからな。」

といつて、許してやりました。

すると雷は大そうよろこんで、

「どうもありがとう。何かお礼をさし上げたいが、あいにく何も持つて来ませんでした。」

何でもほしい物があつたらいつて下さい。空に帰つたら、きつとおくつて上げますから。」
 といいました。

するとお百姓はしばらく考えていましたが、

「さあ、何かほしい物といったところで、このとおり体は丈夫で、毎日三度のごぜんを食べて、働いていれば、何も不足ことはないが、ただ一つ六十になって、いまだに子供が一人もない。これだけはいつも不足に思っている。」

といいますと、

「じゃあさつそく子供を一人さずけて上げましょう。そのうちお前さんのおかみさんにふしぎな強い子が生まれるでしょうから、それはわたしがおくつてあげたのだと思つて下さい。その代わり一つお願いがあります。どうぞくすのきで舟をこしらえて、水をいっぱい入れて、その中にささの葉を浮かべて下さい。」

といいました。

「何だ、そのくらいなことわけはない。その代わりきつと子供を頼みますよ。」

といって、お百姓はさつそくくすのきをくりぬいて、舟をこしらえ、その中に水をいっぱいためて、ささの葉を浮かべました。雷はその舟に乗つて、またすうつと空の上へ

上^あが^いつて行^いつてしま^いいました。

二

それから三月^{みつぎ}ほどたつと、おじいさんのおかみさん^{きゆう}が急^{きゆう}におなかが大き^きくなりました。
そして間^まもなく男^{あか}の赤んぼ^{あか}が生^うれました。

その赤んぼ^{あか}は生^うまれた時^{とき}から、ふしぎな子^こで、きれいな錦^{にしき}の小蛇^{こへび}が首^{くび}のまわりに二卷^{ふたま}き巻^まきついでいました。そしてその頭^{あたま}としっぽの先^{さき}は長^{なが}く伸^のびて、赤んぼ^{あか}の背^せ中^{なか}でつながつていました。

「さては雷^{かみなり}が、約^{やく}束^{そく}のとおり子供^{こども}をよこしてくれた。」

とお百^{ひやく}姓^{しょう}はいって、夫婦^{ふうふ}して大^{だい}事^じに育^{そだ}てました。

この子^こが十三^とになつた時^{とき}、お百^{ひやく}姓^{しょう}は学問^{がくもん}を仕^し込^こんでもらおうと思^{おも}つて、元興^{がんこう}寺^じの和尚^{おしょう}さんのお弟子^{でし}にしました。

するとこの子^こは学問^{がくもん}よりも太^{たい}そう力^{ちから}が強^{つよ}くつて、お弟子^{でし}に入^{はい}つたあくる日^ひ、自^じ分^{ぶん}の体^{からだ}の三倍^{ばい}もあるような大^{だい}きな石^{いし}をかかえてほうり出^だしますと、三尺^{しゃく}も地^じびたがめり込^こんだの

で、和尚おしょうさんはびつくりして、この子はただものではないと思いました。

そのころこの元興寺がんこうじの鐘撞堂かねつきどうに毎晩鬼まいばんおにが出て、鐘かねつきの小僧こそうをつかまえて食たべるというので、夜よるになると、だれもこわがつて鐘かねをつきに行くものがありません。それで長ながい間あいだ元興寺がんこうじの鐘かねの音が絶たえていました。雷かみなりの子供こどもはその話はなしを聞いて、

「和尚おしょうさん、わたしを鐘かねつきにやつて下さい。」

といいました。和尚おしょうさんは大たいそうよろこんで、出だしてやりました。するとその晩ばん子供こどもが、一人鐘撞堂かねつきどうに上あがつて鐘かねをつこうとしますと、どこからか鬼おにが出て来きて、うしろから頭あたまをつかまえました。子供こどもは、

「うるさい、何なにをするのだ。」

といったまま、かまわず撞木しゅもくに手をかけますと、その手をまた鬼おにがつかみました。子供こどもはおこつて、あべこべに鬼おにの頭あたまをつかみました。そしていきなり鬼おにの首くびを引き抜ぬこうとしました。鬼おにはびつくりして、「これは驚おどろいた、とんでもないやつが出てきた。」と思おもつて、逃にげ出だそうとしました。けれど子供こどもはしっかり鬼おにの頭あたまをつかまえていて放はなしません。鬼おには苦くるしまぎれに子供こどもの髪かみの毛けをつかんで、負まけずにこれも首くびを引き抜ぬこうと骨ほねを折おりました。どちらも負まけず劣おとらぬえらい力ちからでしたから、えいやえいや、両方りょうほうで頭あたまの引ひつ張ば

りこをしているうちに、夜が明けかかつて、鶏が鳴きました。すると、鬼はびっくりして、あわてて頭の皮をそっくり子供の手に残したまま、にげて行つてしまいました。

夜がすっかり明けはなれると、みんなが心配して見に来ました。そして子供がとくいらしく、髪の毛のついた鬼の頭の皮を振り回すのを見て、ますますびっくりしました。

鬼というのは、昔このお寺で悪いことをして殺された坊さんが、お墓の中から毎晩出て来るのでした。しかしこのことがあつてから、二度と鬼の姿を見ることがなくなりました。そして鬼の残して行つた頭の皮は、元興寺の宝物として残つたそうです。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月19日作成

2004年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雷のさずけもの

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>